

特別インタビュー

アートにランドスケープの共通言語を探る

ディアナ・バルモリ1

企画・構成／編集部 監修／光井 純

LANDSCAPE WORKS

エコノミーとエコロジーの調和

——オランダの国土計画8

住宅・国土計画・環境省 トメル国務大臣の講演

監修／澤田誠二

◆オランダと日本の国土計画における新しい関係を探る18

インタビュー／伊藤 滋

図書館づくりは街づくり人づくり20

富士市立中央図書館のランドスケープモニュメント

座談会／氏家慶二、白土真二、松本恵樹、山本宣親

オーナーが織り上げた庭園美学26

かみやがわ
紙屋川庭園

文／白砂伸夫

ゲスト空間の演出34

リゾートホテルのランドスケープデザイン

文／ブライアン・ベーカー

Art Work

呼吸する彫刻——瞑想の時を誘う風景42

高田洋一

◆空気を見せる「呼吸する彫刻」

文／竹田直樹

庭を能くする建築家 第4回

ESPAD環境建築研究所46

ゆとりとエレガンス

園田 穰

アメリカのコミュニティガーデン ④

プライドを呼び戻すコミュニティガーデン54

望月南穂、ケイト・スタッフオード

編集兼発行人／丸茂 喬

編集協力／河内厚郎事務所 園田 穰 竹田直樹

堤野仁史 満園武雄

撮影協力／廣田治雄 細川和昭 萩原宏美

ロゴタイプ・表紙デザイン／佐藤晃一

表紙イラストレーション／若尾真一郎

表紙写真／中道順詩

「ランドスケープデザイン」編集部

編集

木幡裕人 高橋佳代子 石川正洋 桐山真帆子

深山美都里

デザイン

盛田尚弘 曾根 拓 鈴木敦子 小浜京子

広告

尾澤彰彦

販売

一ノ瀬健介 松田清江 藤永佐和子

印刷・製本／誠美堂印刷株式

印刷者

須賀 猛

取次店／トーハン、日販、大阪屋、栗田、

鈴木書店、誠光堂

発行所／マルモ出版

(株)マルモ・プランニング 出版事業部

〒150 東京都渋谷区道玄坂 1-20-1-5 F

電話 03-3496-7046

FAX 03-3496-7387

発行日／4月、7月、10月、1月の13日発行

定期購読料／1年間(4冊) 10,300円(税込)

2年間(8冊) 19,600円(税込)

3年間(12冊) 27,800円(税込)

1冊 定価 2,580円(税込)

インドアガーデンの景61

はらかな植物の記憶62

足立直樹

スペイン旧アトーチャ駅の熱帯植物園64

中村雅子、北村亜砂

植物への愛を今に伝える70

イザベラ・S・ガードナー美術館ガーデンコート

春日淑子

栽培するグリーンハウスから
楽しみをクリエイトするコンサバトリーへ78

対談／鳥居恒夫×志田憲一

インドアガーデンと建築、
植物と人間の距離82

インタビュー／藤森照信

雪景色の中、木漏れ日の下で読書する
苫小牧市サンガーデン・苫小牧市立中央図書館84

斎藤浩二

19世紀末の温室の原点を求めた夢空間
伊豆洋らんパーク・トロピカリウム90

満園武雄

直植えの効果——20年を元気に生きる植物
愛知県緑化センターの「グリーンホール」94

加藤 知

【COLUMN】

光ではかられた時87

——水鏡 忘れられた記憶の彼方に——

編集部

「庭」と身体メソッド88

ヒーリングガーデンの可能性

塩原 卓

住民参加でつくるインドアガーデン92

春日井市都市緑化植物園“花と緑の休憩所”

辻本智子

インドアプランツの使用方法96

田中耕次

【TECHNICAL】

室内環境に適した植物の選定とデザイン98

辻本智子

インドアガーデンを構成する要素101

志田憲一、松山 智、須長一繁、小坂浩滋

インドアガーデンの光環境106

洞口公俊

インドアガーデンの管理手法108

藤田 茂

連載

照明探偵団・世界の都市照明④118

CHICAGO：高輝度高層灯

稲葉 裕・森 秀人

景観素材のNEW WAVE②124

光と影が生み出す多彩で素朴な表情

「ペイブブロック・アイ」／菊澤徹土、平松清房

小堀遠州——その生涯と仕事128

第1話 「遠州をかたちづくるもの」

その4 祖の形②／金澤良春

設景の思想④134

20世紀後半のランドスケープ・造園運動小史／小林治人

シリーズ④ 阪神・淡路大震災の復興計画を検証する

現地・現場からの報告と提言

まちの再生はコミュニティとともに／土肥真人142

ガレキが「かたち」になるとき／今井祝雄140

Barrier Free Community142

園芸セラピー、イギリスでは／グロッセ・世津子

「長野パラリンピック」にユニバーサルデザインの提案を！／

ユニバーサルデザイン研究会分科会セミナー報告

PLAYSCAPE FORUM148

魂を活性化させる「遊び」／福川成一

「遊び」のためのデザイン／住吉永匡

LOCAL TOPICS154

減速が生み出す景観(福井県)／遠藤秀平

讃岐平野に一粒の種をまこう(香川県)／齊藤 正

News Clip152

Forum Scape156

New Products162

Book Review160

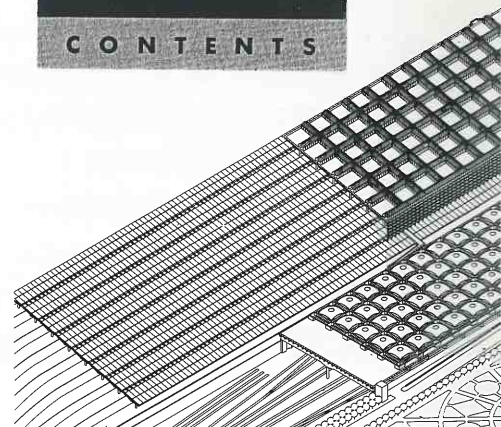
LD People164



スペイン旧アトーチャ駅の熱帯植物園

写真／中村雅子

図面／ラファエル・モネオ



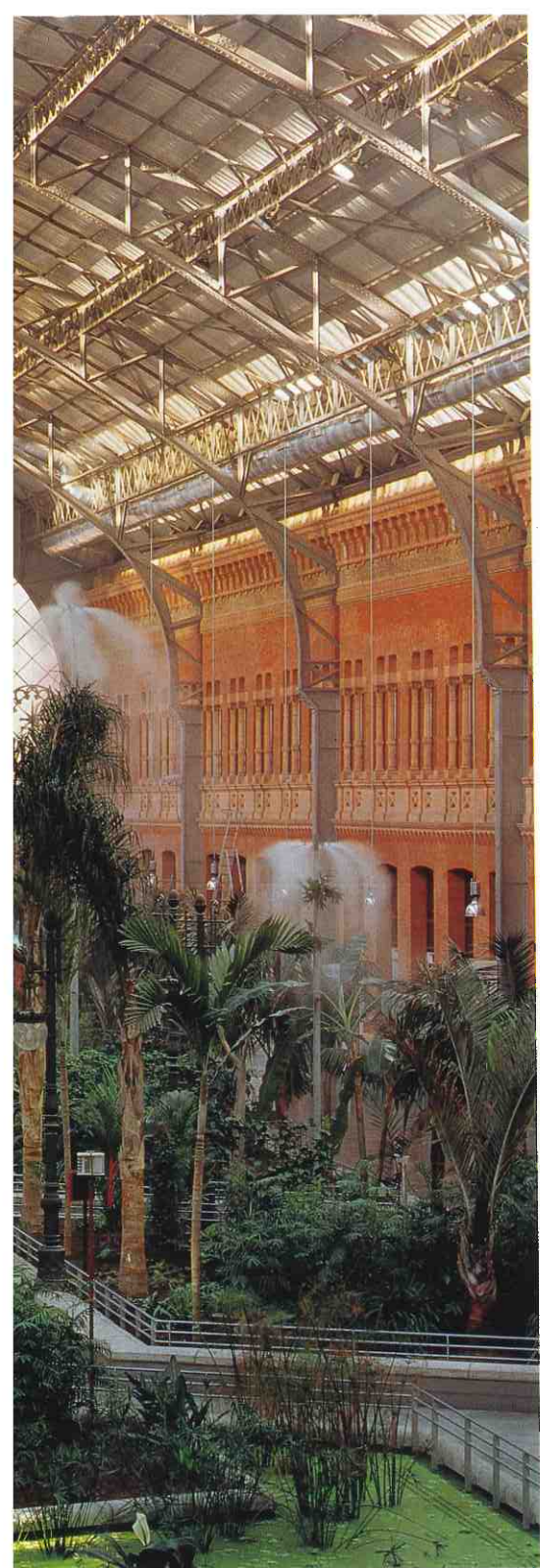
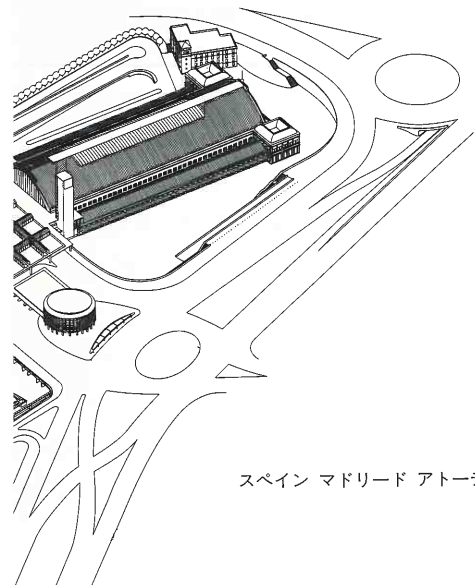


Photo : Duccio Malagamba



スペイン マドリッド アトーチャ駅アクソメ図



7,500m²の19世紀の鉄骨建築物の中にある熱帯植物園は、スペイン国有鉄道交通網の心臓部であるマドリード、アトーチャ駅の中にある。1992年開通の高速列車AVE（コルドバ、セビーリャ、マドリードを結ぶ）が着く長距離列車ホームの向かいに位置し、近郊列車や地下鉄にも隣接しているこの植物園は、1892年に建設、1988年まで実際に発着ホームとして使われていた駅舎である。莫大に増える交通量に、開設当時のキャパでは、度々行なってきた増築程度では間に合わなくなり、駅舎建設100周年、セビーリャ万博'92、コロンブスアメリカ大陸発見5周年を機会に、ラファエル・モネオ氏による新アトーチャ駅プロジェクト(1984~92年)が実行された。残った旧舎は、文化財にあたるため（スペイン鉄道の建設物はすべてそれに相当する）、オリジナルに沿った大規模な修復工事がなされた。そこで、内部の広大な空間の再利用として採用されたのがこの突飛な熱帯植物園の案だった。企画は、建設・運輸省、鉄道交通基幹施設総合課。プロジェクト技術監督だった当課のフリオ・リッコ氏は「駅の再利用としてオリジナリティの高いものにしたかった」と説明する。また、「一般市民にも利用してもらえる空間」にもしたかったそうだ。

マドリードは森に囲まれ、緑豊かな大きな公園がいくつかある街であるが、それらは分散しすぎて、町中は雑然としている。また、内陸性気候で熱帯植物が育たないため、園内は外界、そして駅とは全く異なるオアシスの世界が広が

っている。そして、このスペースのもう一つの特徴は、旅行者もそうだが、多くの市民がくつろいでいることである。昼過ぎにもなると、お年寄りや子供を連れのお母さんたち、若いカップル、学生などでベンチは埋めつくされ、座る場所を探すのが大変なくらいだ。理由は、市内で唯一の熱帯植物園だからである。そこは温度調整された屋内空間で、早朝から深夜まで自由

都心に生まれた 無料の植物園

文／北村亜砂

に出入りでき、建物へのアクセスがしやすい。また植物をくつろいで鑑賞できるスペース（ベンチ）があり、日没後も強い照明で明るく、従来の植物園や駅とは違う性質を持っていることがよくわかる。つまりここは、「駅」と「室内植物園」の要素がうまく混ざり合い、全く新しい空間をつくりあげているのである。これらの要素はどちらが欠けても、ここまで人々が集まるスペースにはなっていなかったであろう。アトーチャは植物園でありながら、駅の一面とし

て、待合室、切符売場、予約インフォメーション、コインロッカー室、出入口、カフェなどを備えた上に、その2つの機能以外に、新たに「広場」という機能を生み出しているのだ。

これだけのスペースを人々が無料で植物に触れてくつろげる場所として提供しているアトーチャ駅であるが、広報部のピラール・ヒメネス女史は、なぜ営業利益がない場にしたのかという質問に、「街の中にそのような場がなければ、わざわざ遠くの郊外に行かなければならない。誰もが家の近くに憩いの場が必要と知っているわ。近代的な機能都市もいいけど、もともと村だったマドリードは、今でも村のままよ。それに経営は収入があれば消費もあるものでしょ」と語ってくれたのが印象的だった。広場に來ていた市民にインタビューしたところ「マドリード人は皆この広場を知っていて誇りに思っているわ。居心地がよくて家が近いからしょっちゅう来るの。今日は普段体調が悪い妹を連れてきたの」と嬉しそうに話していた。

この新空間はオープン後、人々のくつろぎの場を提供するだけにおさまらず、さまざまな展覧会が開催されたり、ファッションショーやテレビ番組のステージ、CM、映画のロケ現場などの舞台に様変わりすることもしばしばあり、文化の場としても活躍している。管理面等でさまざまな問題があるようだが、このスペースは植物とともに少しずつ成長してきた。これからは都市の中の人々にとって、居心地の良い場所としてより健やかに育ってほしい。

“ラ・マルケシーナ” (la Marquesina: スペイン語で駅などのガラス屋根などのこと)。そんな女性らしい響きの呼び名で、アトーチャ駅は1892年の誕生から100年間、市民に親しまれてきたが、1992年に新たにカフェ、レストラン、売店等の商業施設を併せもつ熱帯植物園として生まれ変わった。建物の外観は周囲の広場、道路とのバランスがとて面白い。また内部も同様に植栽部と園路、通路とのバランスがゆったりとしている。植栽全周に設けられたベンチの立ち上がり部分を利用した暖房吹出口とともに広く見えるようにうまく設計されている。これは車や人などのモジュールで決められたものでなく、空間のバランスの美しさで決定されたようである。またこのような建物を遠景から見ることも楽しいことである。

人を育てる場所

文／中村雅子

さて今回取材したのは、まず発案者であるM.O.P.T.(建設運輸省)のチーフエンジニア、フリオ・リッコ氏、現在の運営者である駅広報室のピラール・ヒメネス女史、そしてとりわけ印象深かったのは造園家のミゲル・アグリヨー

氏であった。アグリヨー氏は毎週マドリードと420km離れたアリカンテから、3時間かけて車でここへやってくる。そしてここで繰り広げられる出来事を楽しみにしているようだ。ここには樹種を示すものもないし、園路の順路を案内するものもない。長いベンチと熱帯を想い起こさせるインドアガーデン、子供も自由に遊びまわれる広い園路、皆思いのままここへやってくることを楽しんでいるようだ。以前バルセロナのミロ美術館で、ミロの絵を前に床に座った子供たちが、美術の先生とおぼしき人と自由に発言していたことをふと思い出した。スペイン特有の自由な雰囲気の中で、個人を尊重しながらも自由に発想させる環境がここには根づいている気がした。

Interview

悪条件を乗り越えたアトーチ駅の植物たち

ミゲル・アグリオー・ベラスコ氏 (植栽及びメンテナンス責任者) に聞く



聞き手／中村雅子、北村亜砂

Q：日本では、このアトーチ駅熱帯植物園は非常にせいたくでうらやましい限りのスペースに映りますが、本当に、素晴らしいですね。

A：ありがとうございます。でもオープン当時は本当に大変で胃が痛くなる程でした。

Q：何が一番大変でしたか？

A：まず植物園にしては扉の開口部が多すぎて、外から入り込む冷気で植物がやられてしまったことです。これは最近エアカーテンを設置して改良されました。そして、光不足。冬の自然光では、一番弱い所は2,000ルクスしか入りません。弱い光でも育つポトスが6,000ルクス必要なのを見れば一目瞭然です。屋根のガラス部分が一番近い12メートルのヤシノキでさえも2万5,000~3万ルクスが必要のところ1万5,000~1万6,000ルクスしかたどり着きません。スポットライトが付いているのですが全体に行き渡らず、枯れたり、花や実のサイクルが1,2か月遅れたりしています。これは現在改良申請中で、電力消費の少ない蛍光灯に変更する予定です。病気等はこまめにチェックしているので、問題にはなっていません。

Q：建築家の手による造園計画とデザインの植栽を担当された時はどう思われましたか？

A：こう言っは失礼ですが、建築家は植物を全く理解してません。当初の

計画は無理が多く、造園家による大幅な変更がなされましたし、造園計画も造園家の手によるものとは異なります。見ばえが良いからと光の入らない最奥部に置かれた6本のヤシノキは案の定枯れてしまいました。花壇も1.5mほどの深さで足りるところを3mも掘り下げてしまったため水はけがよくありません。植物は生き物なので、見ばえだけでなく、共存の相性も考えなければなりません。したがって、このようなプロジェクト以外でも植栽がある場合は専門家に任せるべきだと思います。

Q：他の室内植物園との違いは何ですか？

A：ここは駅でもあります。実は国内最大の室内植物園でもあります。さらに他では室内鑑賞用商業植物を扱っていますが、こちらは屋外のもが中心で、すべて原産国からアトーチのためだけに持ってきました。5大陸から集めた1,500種位の植物を混植。研究家にも満足できる内容のものです。

Q：高い柵もなく、これだけ珍しい種が多ければ、さらわれてしまうこともありますか？

A：それはもちろんあります。でも逆に今までなかった植物が、ある日忽然と植えられていることもあります。子供たちに人気のある池の金魚もいつの間にか現れたものです。そういえば一時魚たちが次々と姿を消したことがありまして、誰かがワニでも放したのではないかと安全のため池の水を抜いたら肉食のカメがいたことがありました。

Q：駅に熱帯植物園を設けたことについてはどう思いますか？

A：構造上植物にとってはかなり厳しい条件ですが、その独創性は国内外に良いイメージを与えました。98年のリスボン万博に向けて同市も駅構内に植物園をつくる声が出ています。

Q：メンテナンス方法を具体的に教えてください。

A：ケアは月曜から土曜まで毎日。週に一度、私が見回りをして、肥料及び薬剤投与や葉の切断などの細かい指示を出します。温度、湿度、照明はコン

ピューターで管理していますが、灌水は手動にしています。

Q：人材育成はどのようにしましたか？

A：このような特殊な環境なので、すべては植物の様子から勉強させられています。よく、私がいなくなったら誰が世話をするのか、と聞かれるのですが、他の園芸家でも数年様子を見ていればできるはずで。

Q：植物にとってここは厳しい環境だとすると、街に植物園をつくるのは植物にとって不幸ではありませんか？

A：確かに彼女らは幸福ではありません。しかし、選ばれて人間の精神をリラックスさせるという使命を与えられ、その美貌を披露しているのです。そうしながらも苦しい環境に懸命に順応し、生き続けようとする力で満ち溢れています。アトーチの植物はその力がこの植物よりも強く感じられます。そして、これは一番大事なことで、

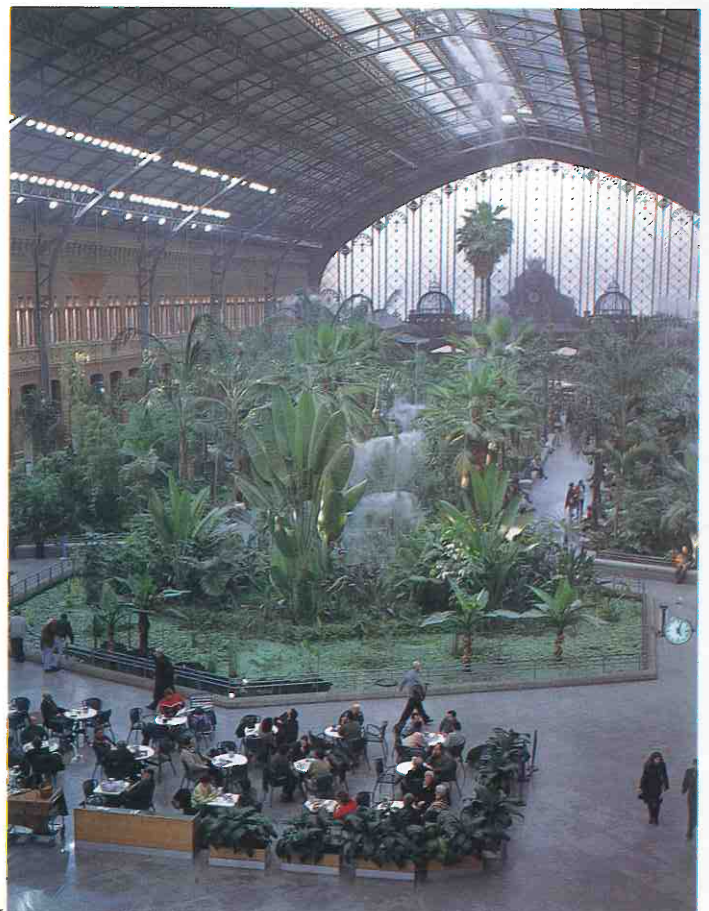
この力こそが、今までの悪環境を乗り越え、設備改良へと事運んだのです。そんな彼女らと接するのは人間にとっても良いことだと思います。植物を好きになれば、人にも優しく接することができるから。ちょっと哲学的ですが…私はずう考えます。

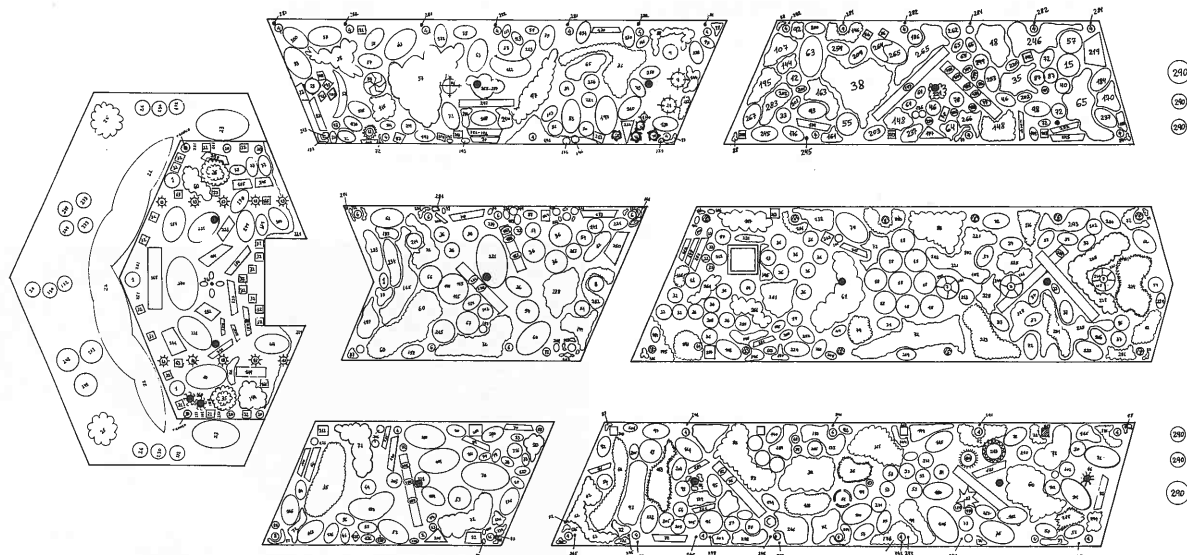
【ミゲル・アグリオー・ベラスコ】

アグレ・アヘンテス・オルナメンタルス・エウロベオス社取締役

野菜・果実園芸／造園技術エンジニア。中でも鑑賞用フラワー・植物の生産においてはスペシャリスト。専門書「ナツメヤシその栽培と活用法」(1983年)の著者。国際やしの木友の会会員。

主な仕事：セビーリヤ万博'92、バルセロナオリンピック選手村、1995年カタール・ニヤ州タラゴーナにオープンしたヨーロッパ最大のテーマパーク「アドベンチャー・ポート」等に造園、植林。現在はリスボン万博'98の会場、スペインカナリア諸島のテネリッフェに建設予定のやしの木園のプロジェクトに参加中。





植栽平面図 1/250

名称 Jardin Tropical de Atocha
所在地 スペインマドリッドアトチャ駅
発注者 M.O.P.T.(Ministerio de Obras Públicas y Transportes)
設計 建設・運輸省 鉄道交通基幹施設総合課
 建築 / (アトチャ旧駅の復興について)
 Rafael Moneo ラファエル・モネオ
 造園設計 / Eupalinos エウパリノス
 担当 / Alfonso Lamiri アルフォンソ・ラミリ
 造園家 / Mariano Sanches マリアーノ・サンチエス
 造園メンテナンス / Miguel Agulló ミゲル・アグリョー・ペラスコス
施工 Huarte ウアルテ、Entrecanales y Tavora エントレカナレス & タボラ
規模 建物面積 / 7,455㎡
 旧駅舎の大きさ / 幅48.76m, 高さ27m,
 全長152.9m
総工費 約14億ベセタ (約12億円)

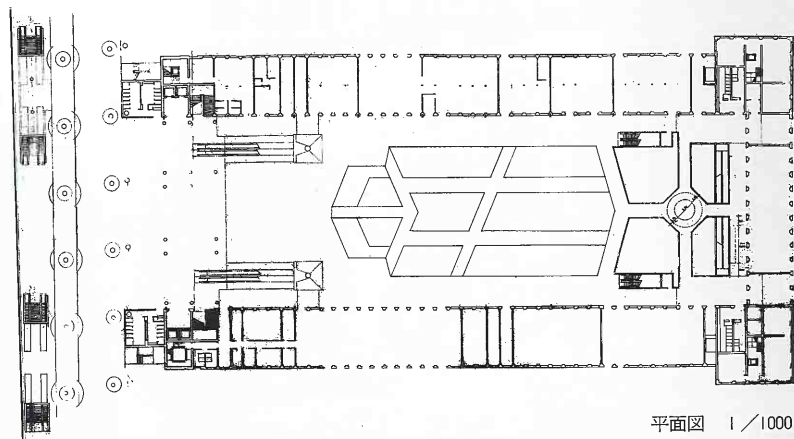
仕様 舗装床材 / グラニット
植栽 旧駅舎内植栽 : ヤシ類 / ダイオウヤシ、ワシントンヤシ、トックリヤシモドキ、コモチクジャクヤシモドキ、カナリーヤシ、ピロウ、ミツヤヤシ、シンノウヤシ、ピンノウヤシ、テーブルヤシ
 添景となる樹木 / オウギバショウ(タブビトノキ)、ホウオウボク
 林床、水辺の樹木、草本等 / クロトン、クチナシ、サンダンカ、アンズリウム、ストレリチア、ヘリコーニア、ジンジャー、マランタ、スパティフィラム、クワズイモ、シュロガヤツリ、ドラセナ、ホテイアオイ、タマンダ、シロアシグサ
 ツル性 / モンステア、オオイトビカズラ、アイビー
 その他 / マチク
 外部の植栽 : マツ、レバノンスギ、オリーブ、スカイロット等
工期 計画1991年2月
 工事着工1991年6月～92年4月(植栽91年12月)
交通 マドリッド地下鉄J号線アトチャ駅下車



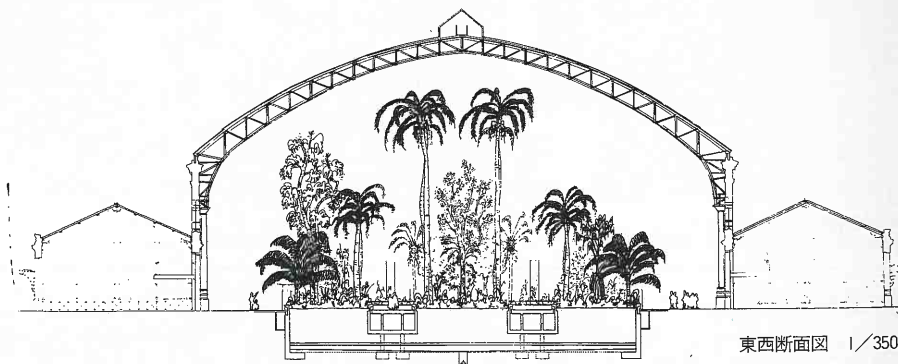


環境設定

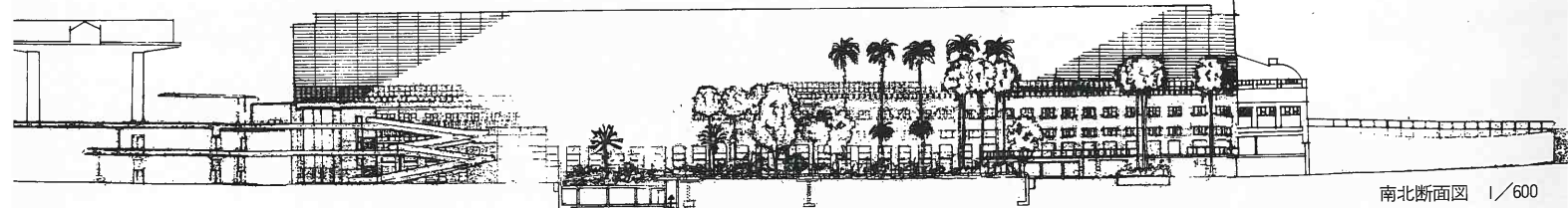
温度	制御 (上限: 25°C、下限: 20°C)
湿度	制御 (50%~70%)
冷暖房	あり
放熱機器の種類	フィン(ベースボードヒーター)・ファンコイル併用
外気取り入れによる冷却の有無	あり
環境制御の方法	自動・人手制御併用
栽培条件	
栽培形態	地植えと鉢栽培 *99.9%地植え
灌水の方法	自動と手動を併用
植物の維持管理	
植物の入れ替え	2~3か月に1回程度。予め種類により入れ替えを想定している
管理体制	毎週内部スタッフによって点検 (スペイン国鉄自主運営、一部外注。ミゲル・アグリョー氏所属の会社にメンテナンスを委託)
防除	内部で薬剤散布
維持費	設備8,000万ペセタ(約7,040万円) / 年間, 光熱費8,000万ペセタ(約7,040万円) / 年間。*現在電気にかわるエネルギーとしてガスを電気に変える機械を構内に置く計画が進行している。そうなると電気代が半分以下に節約できる



平面図 1/1000



東西断面図 1/350



南北断面図 1/600